



原田文孝

はらだ ふみたか / 1956年岡山県生まれ。兵庫県加古川市で肢体不自由養護学校に31年勤める。教員退職後も障害福祉の職場で障害の重い人たちとかわり続ける。NPO法人ささゆり会代表

私に

人生と

言えるものが

あるなら



第9回 人生、わかっちゃいるけどやめられない

私は、52歳の大山さんは2つの顔をもっていると思っていました。1つは、わざと反対のことを言っていて、まわりを困らせる、まるで「反抗期」の子どものような顔です。職員に「いや」「きらい」と言っていて困らせているのです。もう一つの顔は、近所のおじさんのような顔です。私が同僚とうまくいかなかった話をして、私を聞いて、「そうはいかんでなあ」と話に参加してきました。

大山さんの食事指導

そんな大山さんのことで、職員が一番苦労しているのが、食事の介助でした。食べ物の好き嫌いが激しいし、薬も飲みたくしません。そして、食事の介助をする職員の好き嫌いが激しいのです。「○さん嫌いや、替わって」「○○さんと食べたい」と大きな声で怒鳴るのです。職員はその日の担当が決まっているので、大山さんの希望に応えることができません。52歳の大山さんが大きな声で怒鳴るので、部屋に響き渡ります。大山さんも段々興奮してきて、収まりがつかなくなっていくきます。気持ちを落ち着かせるために、部屋をいったん離れることもありました。このように興奮してまった

く食べない日がある一方で、好きな職員

とニコニコ笑って全部ペロリと食べてしまうこともあります。しかし、次の日はその好きな職員とも食べないこともあります。1日3回の食事の時間に、このようなやりとりが繰り返されるのです。大山さん自身も食べることに苦手意識が強いのですが、職員の方にも食べさせることに不安があり、相互に緊張関係を高め合っている状態でした。私は大山さんの食事指導を隔日ですることになりました。4月に初めて大山さんと出会って、さっそく食事指導に入りました。その様子を、記録から紹介します。

4月11日「初めての食事指導。初めは口を開けなかった。少しずつ開けてきたが食べなかった。その後、M職員とやっ

と食べた。」

4月17日「初めお茶、ご飯を食べていたが、薬を飲んでから段々と食べなくなり、『暑い、シャツ脱ぐ』と大声で怒り、『M職員と替わって』と何度も言っていて、怒って食べなくなった。」

5月31日「初めから食べないし、薬も飲まない。F職員がなんとか薬を飲ませた。『学校行かない』『原田先生あかん』『N職員と食べる』と怒鳴って激しく荒

れて食べない。」

このように、初めは少し食べていたのですが、段々と食べなくなっていききました。私も大山さんの食事指導をすることへの苦手意識が大きくなり、相互に緊張関係を高め合っていたようです。私との緊張関係から逃げたくて、他の職員と替わってと要求したのかもしれない。6月になって、私との人間関係が少しずつできてきて、食事の様子が変わっていききました。

食事の様子の変化と葛藤

6月12日「初めは口を開けないが、お茶やフルーツを少し食べだし、魚は『Aさんの魚と替えて』と言うので、替えてきたようにすると食べた。実際には、Aさんの魚と替えていないし、替えていないこともわかっているのに食べた。ご飯も全部食べた。おかずを口に入れるが出した。食べながら『うーん』とうなったり、笑ったりしていた。」

このように食べる日もあるのですが、大山さんの葛藤は続きます。

7月5日「初めから口を開けないで、なかなか食べない。薬を飲んだ後、お茶、ご飯、フルーツを少し食べるが続か

ない。しばらくして『先生 あかん』と言う。怒って食べようとしないので、職員に『先生 今日はいいので帰ってください』と言われる。そこで打ち切つて帰る。」

7月24日『先生 あかん』と言うが、激しく怒らない。なかなか口を開けないが、お茶、フルーツ、ご飯を口の所に持っていくと、口を動かして食べたそうにする。でも、口を開けない。待っていると口を開けてきた。口に入れると『べえ』と出してしまう。この繰り返し

1学期が終了したところで、この年度の大山さんの食事指導は終わりになりました。職員から、もう一人の生徒の食事指導に専念してほしいと依頼があったためです。

人間関係を食べ始める

6月、7月になって、大山さんと私との人間関係が少しずつできてきたので、口に入れた食べ物を「べえ」と出すようになってきました。わざと反対のことをしているのですが、自分でも食べたほうが良いことはわかっているのにやめられないようです。自分の心に翻弄さ